慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・Z・ボグト「文化人類学における構造とプロセスの諸概念について」
Sub Title	Evon Z. Vogt : On the concepts of structure and process in cultural anthropology
Author	十時, 厳周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.3 (1962. 3) ,p.91- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620315-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Evon Z. Vogt
On the Concepts of Structure and Process in Cultural Anthropology

American Anthropologist. Vol. 62, No. 1. February 1960. pp. 28-41.

E・Z・ボグト
「文化人類学における構造とプロセスの諸概念について」

一　雑誌「アメリカン・アンソロポロジスト」は、アメリカ人類学会ならびに地区関連諸学会の機関誌として一八八八年に創刊され、現在、発行回数は年間六回にわたる。人類学の全ての領域にわたる論文が掲載されており、アメリカにおける人類学関係の専門誌としては、もつとも権威あるものの一つとみなされている。一九六一年十月現在、第六十三巻第五号が発行されており、アメリカ人類学界ならびに世界人類学界に偉大な貢献を果してきた輝しい系譜を誇つている。

二　本稿に紹介する論文「文化人類学における構造とプロセスの諸概念について」の筆者ボグト教授は、ハーバート大学人類学部に所属し、長期にわたりナバホ・インディアンその他の現地調査に従事してきた生粋の文化人類学者である。とくに、文化人類学における「価値」の研究者として著名であり、価値研究に際し同教授は、つねに、現地における精密な集約的調査を長期にわたつて反復し、調査研究と理論構成との対応関係に鋭い洞察力をそそいでいる。

ハーバート大学の故クライド・クラックホーン教授を中心とする「五つの文化における価値の比較研究――リムロック・プロジェクト」に、もつとも有力なメンバーの一員として参加している。すでに価値研究に関し多くの論文を発表しているが、代表的な著作として次のものがあげられる。

Navaho Veterans : a study of changing values, Reports of the Rimrock Project, value series, No. 1 (Papers of the Peabody Museum of American Anthropology and Ethnology, Harvard University, Vol. XI, No. 1, 1951)

Modern Homesteaders : the life of a twentieth-century frontier community. Harvard University Press, 1955

三　本論文の中心課題は、文化人類学あるいは社会人類学におけ

る「構造的分析」と「過程的分析」との両者を、如何に体系的に関連づけるかについての方法論的考察を加えることである。この課題が人類学界で注目されるようになつたのは、けつして最近のできごとではない。文化人類学における「歴史主義」と社会人類学における「構造＝機能主義」との対立は、典型的には、人類学におけるアメリカ的傾向とイギリス的傾向の対立抗争として、早くから注目をひいていた問題である。そして、一九五四年のアメリカ人類学会の席上、フレッド・エガン会長は、文化人類学の将来の発展は、両者の統合方向に求めうるであろうことを示唆する趣旨の挨拶をおこなつている。

イギリス社会人類学の構造＝機能主義は、デュルケミアンに属するラドクリフ・ブラウンの社会人類学、または、比較社会学、さらに、心理主義に立脚するマリノフスキーの機能主義、によつて代表されるとするのが一般の通説である。そして、多くの未開社会について、それぞれの風俗・習慣・制度が社会秩序を維持存続させる上で、如何に相互に関連しあつて機能しているかを、克明に分析し比較検討する研究を積み重ねてきたのである。その際の分析のための理論・概念の発展には、注目すべきものが多い。

一方、アメリカ文化人類学の歴史主義は、フランツ・ボアス以来、諸文化の各プロセスおよびその歴史的過程に伝統的な関心をしめし、厳密な記述主義を堅持してきたといわれている。アメリカン・インディアン諸族に関する文化領域の研究にみられるように、諸族の歴史的記述的研究がアメリカ文化人類学の主流を占めていたのである。そして記述主義が強調された結果、文化のプロセスに関する人類学上の理論・概念の発展は、かなりの期間にわたつて不毛の領域のまま放置されてきた傾向がみられる。

ところで、イギリス社会人類学とアメリカ文化人類学の二つの異つたアプローチを如何に統合すべきかという問題は、早くから人類学者によつて注目されてきたし、エガン会長によつてもこの問題の解決が要請されていたにもかかわらず、ほとんどの人類学者は、この問題を正面からとりあげようとはしなかつたといわれている。その主要な原因の一つとして、とくに、文化の「プロセス」に関する理論・概念の貧困さをこの論文の執筆者は指摘している（一八頁）。

文化のプロセスに関しては、これまで、経済的要因あるいは生態学的要因による決定論的解釈にもとづく理論体系、あるいは、技術革新に基礎をおく社会変動の際の個人の適応過程の記述解明、さらには起伏の少ない時間的スケールのもとにおける文化類型の記述分析等の種々の理論・概念が展開されてきたが、執筆者によると、それらの諸理論、諸概念は、変動しつつある社会＝文化体系を記述・分析する用具としては極めて不充分なものであるとされている（一

八―九頁)。

四　そこで、是非とも「プロセス」を記述・分析するための概念化が必要とされるわけで、そのために、人間の社会と文化の本質に関するプレミスの検討にまで遡ろうとする。

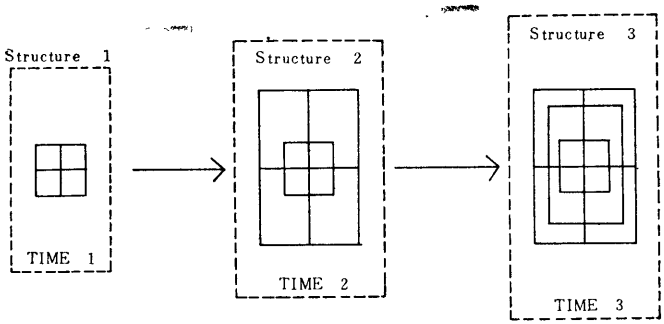
人間の社会と文化の本質に関する前提は、一方ではそれを「均衡」を保ちつつあるものとしてとらえるか、あるいはその逆に、それを「変動」しつつあるものとしてとらえるかの、二つのタイプに分けることができる。構造＝機能主義の準拠する前提が「均衡」の考え方であり、歴史主義の準拠する前提が「変動」の考え方であることはいうまでもない。

この二つのものの考え方の相違は、人類学の理論構成の問題を離れても、他のあらゆる面で重要な意味をもつことが多い。執筆者は、とくに註をもうけて次のようにいつている。

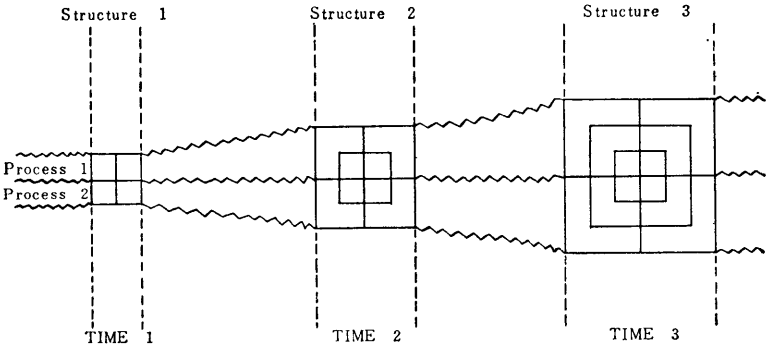
「この基本的プレミスに基づく政治上の考え方は、現在の国際情勢にハッキリとあらわれているように思う。アメリカの対外政策の中心的傾向の一つは、ホメオステイティックな状況あるいは条件を維持し恢復しようと努力している点にある。つまり、すべてのものを均衡状態に保とうとしているのである。これに反し、共産主義者の世界は、それと逆の前提に立脚して活動している。つまり、社会と文化の諸体系はたえまなく変動しつづけているという考え方にたつているのである。そこで、かれらはたえず「変動」そのものを予期しているので、勃発する経済的社会的政治的大変動を待ちかまえ、それを巧みに利用することができるのである。その意味で、かれらはつねにイニシアティブをつかんでおり、それに反しアメリカ側は、つねに、共産主義者の計画や政策に反応しなければならないはめにおちいり、いつもやつかいな立場に追いやられているのである」(三〇頁)

イギリス社会人類学の構造＝機能主義が植民地支配の帝国主義と無関係ではなかつた、といわれる一部の学説史的解釈も、この「均衡」概念を主軸とするプレミスと決して無関係ではないように考えられるのである。

ところで、「変動」概念を主軸とするプレミスに立脚すると、均衡概念にもとづく「構造的分析」の諸概念は、たえまなく変動するプロセスのなかの一つの枠組における一つの類型のみを研究していることになる。その意味で、また、そのただ一つの枠組に関する限りの明確な精密な記述研究を推進しうることにもなる。しかも、プロセスに関する諸概念の貧困性が指摘される現在では、構造的分析と過程的分析の統合の問題は、結局、進行しつつあるプロセスを記述し概念化し解明することの問題に帰着する。プロセスがどのような速度において、どのような方向に進行しつつあるか。さらにプロ



〔Structural Analysis〕



〔Processual Analysis〕

セスがどのような技術＝環境的、社会的、文化的、心理的諸変数の複合的な相互作用を創り出し、あるいは、その相互作用によつて維持されているか。これらの問題が把握されると、構造的分析それ自体も、さらにいつそう明確に展開されうることになるのである。そして、両者の分析の概要を、執筆者は上のような図表にしめしている(二〇頁)。

五 プロセスに関する分析を進めるためには、実証的観察にたえうるような、しかも検証されうる諸命題が建設的でありうるような、実際的方向にプロセスの概念化を試みなければならない、と執筆者は主張する。その第一段階として、微視的時間スケールにみられる短期的プロセスと、巨視的時間スケールにみられる長期的プロセスとの、両者の相違を明確に区別することからはじめる。前者を「回帰的過程」(recurrent processes)、後者を「指向的過程」(directional processes)とよんでいる。

回帰的過程は、子供の社会化過程、スモール・グループにおける相互行為、役割取得、社会の年間行事サイクル等によつて代表され、それら諸類型の「反復性」に分析の重点がおかれている。構造学派が主としてとりあげてきた問題領域をさしているものと解してよい。

これに反し、指向的過程は、構造そのものの基本的変動によつて代表され、時間的流れにおける「非反復性」に分析の重点がおかれている。シュペングラー、トインビー、ソローキン等によつてとりあげられた、余りにも野心的な、その意味で実証的に取扱いうる範域を超えた、諸理論構成の問題領域をさしている。

後者については、すでに人類学の領域においても、文化進化（ホワイト、ステューワード）、流程（サピアー、エガン）、合生（スミス）、世俗化（レッドフィールド）、成長（クローバー）、類型飽和（クローバー）等の諸概念によつて究明されてきた。

指向的過程の記述、分析は、歴史学、人類学の領域にとどまらず、社会学の領域においても、古くから中心課題の一つとして注目されてきた問題である。コントから最近のリースマンにいたるまでの「諸発展段階説」がそれに該当する。さらに、経済学その他の領域においても、この問題の発展段階説的解釈をめぐる多くの論議がなされてきたことは周知のとおりである。

ところで、指向的過程についてのこれまでのもろもろの理論・概念の一部の有用性を肯定しながらも、執筆者は、長期にわたるフィールド研究の経験から、実際に観察しうる小規模な伝統的社会での指向的過程の問題を、さらに詳しく論じようとする。そうすることによつて、構造＝機能主義が取扱つてきた回帰的過程と、本稿の主題となつた指向的過程との関係を、いつそう明確にとらえようとするのである。

結論的にのべると、指向的過程は社会と文化のシステムの担い手である個人の日常行動の観察から抽象化され、しかも同じ観察から抽象化される回帰的過程とは全く異つた抽象水準で進行している点に注目することである（二三頁）。つまり、構造主義者が陰に陽に仮定している「動きつつある均衡」、あるいは、「均衡持続の集積」の考え方を真向から否定している。そこで問題は、一体、何がそのような指向的過程をひきおこすのか、何がそのような指向方向の決定要因となるのか、といつた事柄に移つていく。

指向的過程をひきおこす重要な恒常的メカニズムの一つは、執筆者によつて、「もろもろの社会の《文化》と《社会》の二つの次元の間におこるテンション」（二三頁）であると考えられている。このことは、別段それらのテンション以外の、たとえば、環境的変化、経済的発展、人口数の増減、他文化との接触、ある種の心理的変数等の諸力が全く作用していない、ということを意味するものではな

い。ここでは、全ての変動の際にみられる「恒常的力」を、とくに中心問題としてとりあげているに過ぎない。

社会と文化の概念の相互の関係については、これまで多くの学説によつて論議されてきたが、そして、そのことは、また、典型的には、イギリス社会人類学における文化概念の否定とアメリカ文化人類学における社会概念の低位説として著しいコントラストをしめしてきたが、ここでは執筆者は、ギールツ、クローバー、パルソンス、シルス等の区分説を踏襲する。そして、ソローキンの術語を用いながら、文化と社会の二つの次元におけるそれぞれの統合のタイプを、論理＝意味的統合と、因果＝機能的統合とに区分する。この二つのタイプの統合は、概念上、別の系列に属するものとされているので、両者の間には、程度の相違はあつても、つねに不一致とテンションがみられるものと考えられている。この不一致とテンションが、まえにのべた指向的過程をひきおこす恒常的メカニズムの決定的な要因であるというのである。

さらに、指向的過程の方向決定に影響する主要な変数の解明と分析について、その複雑さを充分に認めながらも、次のような仮説を展開している。すなわち、「一つの社会の文化の次元にみいだされる中心的価値志向（central value-orientations）は変動方向にたいする一つの決定的な道標（crucial guide-line）を構成する」（二五頁）と考えられている。価値研究に多年従事してきた執筆者の考え方としては、当然すぎるほど当然な結論であるといえよう。しかしながら、その場合でも、執筆者は、決して価値志向決定論の立場をとつているわけではなく、重要な諸変数のうちのもつとも決定的な一つの変数としてそれを取扱つているに過ぎない。

したがつて、次の問題は、どのような条件のもとに、どのような範囲にわたり、文化変動のどのようなポイントに、価値志向変数が決定的な影響（decisive effect）をおよぼすかを、多くの文化変動の場合について実証的に研究しなければならなくなる。勿論、その場合においてすら、技術＝環境的変数、構造的変数等、他の諸変数を決して無視しているわけではない。むしろ、変動方向決定の際に作用する価値志向変数の重要度はその社会の経済的技術的水準と対応する、といつた一般命題（二六頁）を展開しているのである。つまり、経済的保障度が低いほど、価値体系的変数の重要度は低く、経済的保障度が高いほど、価値体系にもとづく選択行為が未来の変動方向に決定的影響をおよぼす可能性が強くなる、と考えられているのである。もし、この一般命題が正しいとすれば、執筆者もいうように、経済的保障度が急激に高まりつつあるわれわれの現代の歴史においては、それぞれの社会の価値体系の変数の重要度がますます増大してくることになるであろう。

六　社会と文化の次元の間にみられるテンション、および、価値志向変数の取扱いについて、執筆者は、これまで長期にわたつて研究し続けてきたナバホ・インディアンの例をひきながら、さらに詳しい展開を試みている。社会と文化の体系を分析する場合に、それらの体系の諸副次体系、たとえば、儀礼、親族、言語、経済、政治等の副次体系の一つに、まず、これまでの過程的分析を適応することを示唆している。そして、各副次体系についての同様の分析を進めながら、どのようなアスペクトに、どのようなプロセスが進行しているかを詳細にみきわめ、そうすることによつて、最終的に、その社会についての全体的プロセスを解明することがのぞましいとのべている（二六頁）。つまり、社会と文化の体系をただちに全体として把握しようとするよりも、このような諸副次体系究明の手順をふみながら研究を進めることのほうが、いつそう厳密な妥当性のある分析を進めることができるというのである。そして、ナバホ・インディアンのセレモニアリズムに関する変動の諸過程を三段階（結社―精緻化―類型飽和）に区分しながら、それらの変動過程をひきおこした決定的要因をナバホの社会における文化と社会の次元の間のテンションに求めている。さらに、それらの変動過程を方向づけた決定的要因として、ナバホに独自の価値志向――身体の健康に重要な価値をおく――を指摘している。つまり、ナバホ社会は、狩猟採取の段階から農耕および牧羊の方法をとりいれたことによつて、より多くの食糧を手に入れ、その結果、人口を急激に増大せしめうることができた。人口の増加にともない、さらに、母処婚＝拡大家族、氏族、連合氏族、その他の社会構造の形態が豊富になつたが、儀礼的信仰および儀礼的慣行は、狩猟採取生活の時代と結びついたままのものであつた。そこで、複合化した母系的構造をもつ社会の体系と、初期の狩猟採取生活から続いてきた文化的信仰および慣行との間に生じたテンションが、セレモニアリズムにおける結社から精緻化への変動をひきおこし、その精緻化の方向は、ナバホをとりまく近隣の諸族とは異り、身体の健康に重点をおく基本的価値志向の影響によつて、個々の人間の病気の治療の方向に集中したといわれている。

以上のナバホの例によつても理解されるように、社会と文化の次元の間に生ずるテンション、および、その社会の価値の価値志向の類型に注目することが、指向的過程の記述・分析のよりどころとなつている。勿論、これだけのことで、プロセスに関する理論・概念の全てが完了したわけではない。執筆者もことわつているように（二八頁）、本論文にのべられた諸概念は、いまだきわめて曖昧であり不明確なものであつて、過程的分析のための一つの原型理論（prototheory）を提示したに過ぎないとされている。そして、この

原型理論をさらに適切な理論へと発展させるために、執筆者は、人類学的現地調査の方法とタイミングを、次のように根本的に改革しなければならないと主張する。すなわち、これまでの構造主義者がとつてきた、㈠一ヵ年間、あるいはせいぜい二ヵ年間にわたる集約的観察を持続する方法、㈡一度調査した部族あるいは社会を十年後、あるいはそれ以上の期間をおいて再調査する方法、だけでは観察期間が短かすぎて構造的分析に終始してしまうか、あるいは、せいぜい回帰的過程の分析に止つてしまうと考えられている。そこで、指向的過程を分析するためには、同一の部族あるいは社会を、少くとも二〇ヵ年、あるいはそれ以上の期間にわたつて観察し続けうるような、特定の調査プロジェクトが考慮されねばならなくなる。そして、ある種の人類学的現地調査のプロジェクトは、すでにこのような要請に近づきつつあるといわれているが、いまだ充分に組織化されていないので、とくに、この点の改革が執筆者によつて強くのぞまれているのである。

七　構造的分析と過程的分析の統合に関する方法論的考察は、今後とも、人類学理論における重要な課題の一つとして、是非とも取りくまねばならない不可欠の問題である。本稿に紹介したボグト教授の論述には、その意味で、われわれの関心をひく点が多いことに注目しなければならない。とくに、指向的過程の分析に関する論述には、きわめて興味深いものが多いように考えられる。

社会と文化の次元の間にひきおこされるテンションを抽出したことは、この種の研究領域における新しい業績であろうと思われる。というのは、これまで、オグバーンの「文化遅滞説」にみられるように、技術的＝環境的変化にたいし、価値的＝構造的変化が遅滞するということで説明されてきた現象が、ここでは、社会＝文化の概念を分析用具として体系づけることから、いつそう明確に体系的に分析されうる可能性が生じるからである。

さらに、指向的過程の方向と価値志向の変数を関係づけようとした意図も、明治以後のわが国の経済発展（指向的過程）の方向を理論的に跡づけようとするわれわれにとつて、きわめて示唆するところ多いように思われる。わが国の基本的価値志向が何であるかは、勿論、容易に解明しきれない問題であるが、ベラの著書（Robert N. Bellah, Tokugawa Religion: The values of pre-industrial Japan, 1957）が指摘したように、団体主義＝団結の価値、政治主義＝忠義の価値、が日本の歴史に一貫してみられる中心的価値体系であるとすれば、それらの価値志向は、明治以後の変動方向と決して無関係ではないように考えられる。

このような方針に準拠する分析方法は、さらに、諸副次体系の個々の分析を通していつそう綿密に集約的に進められる必要がある。

それには、人類学の領域においてのみならず、社会学その他の隣接諸科学の協力を求めながら、新しい統合研究の一環として推進することが肝要であろう。

ボグト教授が伝統的小社会の現地調査を念頭におきながら展開した論述は、高度の産業社会の一つであるわが国の変動過程の研究にたいしても、原型理論としての基本的意義を失うものではない。原型理論の次の展開は、いつにわれわれの今後の研究活動にかかっているのである。

（十時厳周）

筑波常治著『日本人の思想』

――農本主義の世界――

最近、日本の思想に関する著書がつぎつぎと出版されるようになつた。そのなかで筑波常治氏の『日本人の思想』は型は小著ながら新しい視角からこの問題に接近しようとしている異色ある思想書である。

結論から先にいうと筑波氏は、日本人の思想とは、とりもなおさず「農本思想」であると考えている。この「農本思想」という角度から日本の思想を見事に切りさばいてみせる。かつて私は筑波氏の「日本農本主義序説」なる論文（『思想の科学』一九六〇年六月号）に接したとき、新しい視角から日本思想史を鮮やかに分析していくその見事さに感動したものであつた。

筑波氏は、従来の日本思想史は、外来思想の輸入と挫折のくりかえしの叙述に費されているが、思想史においてもつと大切なことは、外来思想が日本にはいつてから歪められる過程とその原因を追求することではないかという。なぜ外来思想が歪められるかといえば、日本人の世界を根柢において制約している〝農〟の伝統――農本思想があつて、そこを通過するとき、いかなる外来思想もプリズムを通る光のように屈折するのだ。だからこの農本思想を究明しないかぎり、本当の日本思想史はつくりだされない、と筑波氏は考えるのである。

なぜ日本人のあいだに農本思想が生れてきたのか。この点について、筑波氏はつぎのように説明する。それは日本人は狩りと漁業の段階から牧畜段階を通らずに、一挙に農耕社会を出現させてしまつたことに由来する。農耕――殊に稲作は一つの土地にじつとしており、単調な反復作業をすることで生活が可能である。日本人の〝お